

科学研究費助成事業（基盤研究（S））研究進捗評価

課題番号	17H06117	研究期間	平成29(2017)年度 ～令和3(2021)年度
研究課題	天皇家・公家文庫収蔵史料の高度 利用化と日本目録学の進展—知の 体系の構造伝来の解明	研究代表者 (所属・職) (令和4年3月現在)	田島 公 (東京大学・史料編纂所・教授)

【令和2(2020)年度 研究進捗評価結果】

評価	評価基準
	A+ 当初目標を超える研究の進展があり、期待以上の成果が見込まれる
○	A 当初目標に向けて順調に研究が進展しており、期待どおりの成果が見込まれる
	A- 当初目標に向けて概ね順調に研究が進展しており、一定の成果が見込まれるが、一部に遅れ等が認められるため、今後努力が必要である
	B 当初目標に対して研究が遅れており、今後一層の努力が必要である
	C 当初目標より研究が遅れ、研究成果が見込まれないため、研究経費の減額又は研究の中止が適当である
(意見等)	
本研究は、歴史学・古典学の基盤をなす一次史料の研究資源化を、デジタル化、データベース化、そしてウェブ公開によって大規模に進めるプロジェクトである。	
禁裏・公家文庫所蔵本100万コマを東京大学史料編纂所の Hi-CAT Plus 改良版でウェブ公開するという第一目的は既に実用化段階に入っている。また、東山御文庫をはじめとする諸資料のデジタル化やデータベース化、古典学研究支援ツールの開発も着実に進展している。これらの情報基盤を活用することによって、前近代日本の「知の体系」として禁裏・公家文庫の構造とネットワークの共時的検討、伝来過程の通時的検討が本研究計画の最終年度までに飛躍的に進展することを期待する。	

【令和4(2022)年度 検証結果】

検証結果	当初目標に対し、期待どおりの成果があった。
A	天皇陛下の即位に伴う儀式や、新型コロナウイルス感染症の流行が生んだ困難にもかかわらず、相当量の天皇家・公家文書をデジタル化し、Web上で利用可能にした。また、仕様の IIIF（トリプルアイエフ）への移行、検索機能の多様化など史料の国際的実用化のための技術革新にも力を注いだ。散逸・破壊・寄贈など偶然的要因の影響を受ける蔵書・現存史料の体系と歴史事実の体系の間のギャップを埋めるのは当該研究分野において得意とされる作業であるが、第8輯を迎えた『禁裏・公家文庫研究』などでも着実に行われている。
	他方、「知の体系」をはじめとした概念的な研究目的を達成するための努力が十分になされたとは言えず、現状での研究成果は専門家集団のための研究資源の充実という枠を超えるものではない。